

50577

教科書文庫

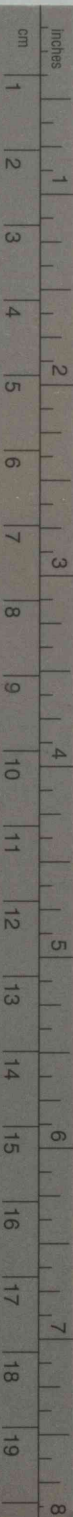
5
810
41-1947
01304 49846

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

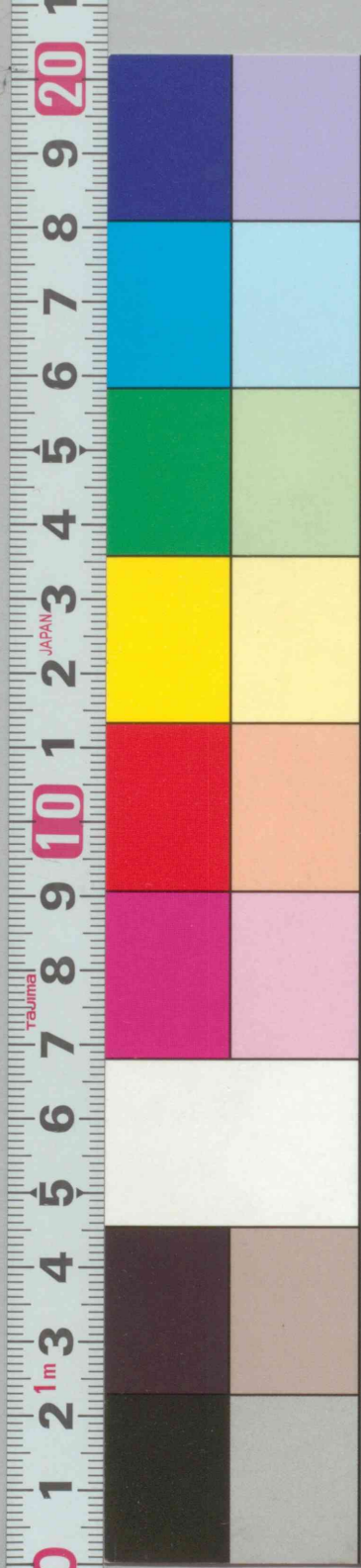
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



教科書文庫
5
810
41-1947
0130449846

中等國語 三

文部省



(2)



教科書文庫
5
810
41-1947
0130449846

中央図書館

中等國語 三

文部省

広島大学図書
0130449846


(2)

広島大学図書
0130449846


目 録

一 樹木賛仰	一
二 生活断片	八
三 文化と教養	十三
四 芭蕉の名句	二十一
五 乙女峠の富士	二十五
六 銀の燭台	三十二

一 樹木賛仰

わが家のうしろに、
私は一本のししい木を持つ。
よく音のするきれいな小川を中にして、
かれはその累々たる葉むらの冠を、
さわやかな村路の上に、
深く重たくさしかけている。
喜ばしい青空と太陽との晝間、
村の遠い入口から幾十の立ち木を超えて見えるかれは
まるでさんくと輝く緑のかさのようだ。
また天に百千の星の散って、
ふかふかとした路の奥、そよ風の休息の歌に、
いなかはこんもりと眠る夜、
この村落の中ほどにひとり巍然として立つかれは
その絶大な翼の下に、

ひなを守って身を伏せる大鳥のようだ。

村人は知っている、ひとり残らず、

昔かれらがまだ子供であり娘であった時から

こゝに立っているこのしいの木を。

かれらは愛している、この古なじみを。

そのころでさえもこんなに大きかったこの樹木を。

かれの張りまわす豊かな樹陰は、

そこにびろろとや寶石のような小魚や虫のすんでいる

どんなにいい川狩の場所だったか。

またかれが来る秋ごとに落す鑄銅の実は

どんなにうれしいたくさんなこまになったか。

しかし、それよりも多くのことを、

かす／＼の歴史を、

かれらの祖父らの世から父らの時代にかけての

百年の昔を、得意を、失意を、

人の世の変わるふち瀬のこと／＼／＼を、

風こそ、雨こそ、太陽こそ、星こそ、

そして、このしいの木こそ見て来たのだ。

四月に私はかれを愛する。

再生の季節のほがらかにゆるんだ春風が

そよ吹く風のやさしさと甘美とをもって、

年古りさびたかれのいかめしい樹幹を吹きめぐる時、

そのしわみこわばった樹皮のよろいの下にこそ、

新しい命の汁液じゆつのこん／＼と流動して、

その大いなる永遠の若さが

自分の内にも呼び覚まされて、

生き動くのを私は感ずる。

それから五月、初夏のころ、

紫のふじの房飾りが甘やかなにおいを放つ幸福の日、

その千万の葉の群れが、

なごみ渡った空の下、

薫る微風にひるがえる音に、

冬に奪われたあの典雅な音楽を、

絶えて久しい自分の愛の詩を、

再び取りもどしたうれしさに身震いする。

夏が来て、

天空が深遠な海のようにひらけ、

はなやかな熱氣が終日かれの晝寢を揺る時となれば、

それは大空の下の

光耀こうようと陰影との巨大な巢である。

せみの歌が周囲幾町かの間を震撼かんし、

この天然の堂宇のまわり、

青絹のように底びかりする虚空を、

玉虫の群れが歓喜に狂って飛びめぐる。

またよく晝すぎの空間に電氣が満ち、

天がにわかにかき曇って黒雲の層が厚く重なり、

万物ことごとく沈黙して、風がひとり、

つめたくあらく吹き起る時、

かれは身を震わせてその眞晝の夢から覚める。

やがて射おろすいなずま、とどろく雷かみ、

それに続いて、地を圧する

滝つ瀬のような無量の雨、

わがしいの木はこの時こそ巨人になる、しゝになる。

横しぶきの雨の中、紫の風の中、

またちどろなすやみの中で、

たえまなく十字を描く黄銅の電光に照らされながら、

かれはその千万ののどをもつてほえ猛り、

小山のようなたてがみを逆振りして、

おのれをねじ倒そうとするあらしのいきおいに抵抗する。

私は忘れない、この夏の日の壯烈な格闘を、

その思い出は安易な時の私を敢然とさせ、

私の魂にいつも断乎だんぷたるものを目覚めさせる。

季節が変わって、

雲の美しい秋が来る。

ひとみを洗う清らかな眺望と、

心を喜ばせる黙想もくそうとに誘われて、

私の毎日の散歩の路が遠くまた廣くなる。

見よ、静観と新涼との並木路の奥に、

十月は

懐かしい薄緑の天門を開いている。
しかし、しいの木、私の思いはかれに行く。
よく、小川のへり、かれの真下に立って、
八重十文字に地にくいこんだ根の張りから
底知れぬ潜熱の力を私は感ずる。

またそのかん／＼ひびくような鋼鉄の軀幹から
たくましい心胆と弾力のある健康との
いかに望ましいかを私は感ずる。

そして、ついに

旺盛に繁茂した枝葉のやみを見あげながら、
うっそうたる思想の含蓄の

いかに無限の美を人に加えるかを学ぶのだ。

こうして、かれとともに生きる月日の終り、冬にこそ、
いっさいがあらわにされた凍結と眞実との季節にこそ、
あつゝい熱情が私の内に確かな信念となって凝縮する。

私はかれを愛し、かれに学び、かつかれを贊嘆する。
そして、祈りかつ願う。

かれがいつも私のそばにいて私の生活に入りまじり

私の生きる毎々と藝術との

ゆるがぬ規範となるようにと、

また日を浴び風にはためくその枝や葉が

私の詩のよく飛躍する章句となり、

その巍然たる相貌（ポラ）が

同時に私の相貌となってくれるようにと。

あゝ日々にいや増す愛と熱情と

また尊敬の念とをもつて私はかれを贊仰する。

それはかれが光輝と陰暗との時を通して、

いつもさっそうたる精神と剛毅な魂との象徴であるからだ。

そして、永遠に若く純潔に、

はつらつたる美の模範、

また人間の帰趨（きしゆ）の教訓でかれらがあるからだ。

二 生活断片

景色を写生する時に、どこからどこまで絵に取り入れようかと、いろ／＼にくぎってみる。そうして、ここはと思う所を画面に収める。

これと同じように、自分の生活を振り返ってみて、何か書こうという時に、どこからどこまで書こうかと苦心することがある。たとえ平凡な生活でも、その中にはきつとその人らしい面影をとどめるところがあるものである。それを見つけ出すのは、喜びであり、また楽しみでもある。

本課は、女生徒と男生徒の生活のある断片を記録したものであるが、それ／＼にももしろさが含まれている。一つには女子らしい生活美が現われ、一つには少年らしい姿が写されている。

自分の生活をいたすらに見過ごさないで、静かな、美しい、たくましい自分の横顔を見出だして、それを克明に描いてみようではないか。

生け花

無造作にさされた一輪の花にさえ、私たちはやさしいなごやかな感じを受ける。まして自分の生けた花の前にすわった時には、大きな喜びで胸がいっぱいになるのも、当然のことであろう。このように私たちは生活の中に美を求め、美をつくり出すことに喜びを感じている。この意味から、華道はも

う少し日常生活に溶けこんでもよいのではないだろうか。

華道には、いろ／＼な流派や種類があるが、いずれにしても、理想とするところはたゞ一つ、高い美をつくり出す境地であろう。だがそれは私たち初歩の者には、なか／＼つかむことのできないところであるかもしれない。

「生け花を習得する者は清純な心持で生き／＼とした花を生けるように心がけねばなりません。」と、日ごろから先生にいわれる。清らかな心になってはじめて美しいお花を生けることができる。

「生華三才の形は、宇宙万円の象より出づ。されば、三枝をさして、天・地・人(または真・流・受)となふ。」

と、書かれたものを読んだことがある。宇宙にたとえた円い空間を、真・流・受の三枝がゆるやかな曲線を描いてくぐる。実際に生ける時には、この根本の形に、真前・止の二枝が加わって五枝となり、その曲線と統一の美しさが、うしろの掛軸に和合して、落ち着いた静かな世界をつくり出す。このなごやかな雰囲気こそ、私たちの日常生活にとりいれたいものである。

はじめて小枝を手にした時は、どうしても自分の心を集中させることができない。軽く小枝を握った指先がかすかに震えて、ためらうことなく目的に向かって飛びこむことがむずかしい。あせればあせるほど、心は乱れて来る。しかし一回、二回と、回数を重ねるたびに、心のあせりも少なくなる。何もかも忘れて一本の小枝に全心を集中しえた時には、喜びよりも先にほっと安堵の息がもれる。そこには自分とお花のほかには何も無い。のび／＼とした形の内に、美しい諧調を保った曲線が空間を切る。

生けおわった静かな一瞬、喜びがこわばった心を柔らかくする。掛軸の墨の色と小枝の緑がはえる。静かな一瞬。私はこの一瞬を愛する。

華道の高い境地を悟ることはむずかしい。しかし、調和によってつくり出される落ち着いた雰囲気の中に、生活の喜びを見出だし、いつまでもいつまでもそれを愛して行きたい。清らかな人生を送るために、一步一步進んで行く自分自身の姿を、生けおわったお花の上に見出だすのも楽しいことである。

お茶

すっかりもみじした榛名の山を障子の窓越しにながめながら、はちきれそうなひざをそろえて、きょうはじめてと、のえた茶の道具——それも自分でくふうした竹細工とそまつな茶わんであったが——を隣の人のと見比べて気にしながら先生のおいでになるのを待った。

私は今こゝにみんなと肩を並べてすわっている。やがて障子が静かにあいて、先生がはいっておいでになった。一通りのあいさつがすむと、私の手の上には目にいたいような赤いふくさが載せられた。はじめのうちはふくさのたゞみ方にも首をひねっていたが、今では思うようにはこべるようになった。ことにふくさを三角の形から左手を滑らせて三つに折る時の手ざわりは忘れられないものである。それから……また静かに時は流れる。沈んだ光を反射した茶わんに左手をそえて右手で静かに落す茶せん。この時ひびく音は茶せんを持った人へのみ感じられる音である。時を超えていつも変わりないゆかしいこの音だけが、茶道に学ぶ人々を結びつける音かもしれない。実に古典的な、それでいてやさしい余韻である。床の間の花が揺れ動くかと思われる静かな一瞬。

やがて茶もたておわると、いよ／＼客にその手前を見ていたゞくことになる。

主人になった人々が静かに立つと、白足袋が畳にはえてひとしお心が落ち着く。あいさつをして茶わんを手にした私は、その高いかちりの中でふつと思ひ出した。日本のお茶ほど時間を無視したものはない、あれはひまにまかせてするもので、若い者には必要でない、とよくいわれることば。

お茶は確かに一般には多くひまのある人がたしなんだことは事実かもしれない。しかし私は体験してみればじめて、指を一本動かすにもむだがなく、実によく時間をさばれていることに気がついた。お茶が私たちの修養にあずかって力のあることは、じつとすわっている忍耐力がつくことからだけでも強く感じられた。毎日の生活がとかくあら／＼しくなりがちな私の行動にもつゝまじさが伴ない、ほんの少しでも落ち着いた豊かな空気にひたることは、なんといいてもうれしいことである。

いつしか鐘も鳴って、この時間も終りとなった。私はおじぎをしながらまた扇子をうしろにまわすのを忘れてしまっているのに気がついた。

思ひ出の土

机のかたわらに、小さなかんが置いてある。

さしむふたをこじあけてみる。こまかな砂まじりのひとつかみの土、さら／＼と音を立てる土、西の宮球場の土だ。ぼくが、三つの試合を通じて、しっかり踏んでいた二壘の土だ。

八月十五日、数万の観衆の凝視の中で、純白のユニフォームのそでの下から濃紺のアンダーシャツをのぞかせたぼくたち九人は、母校と郷土の名譽を双肩になんて、西の宮球場に感激の第一歩を印したのであった。

ぼくたちの姿を、観衆の波にまじって、スタンドからながめていた先輩の多くは、この瞬間、多年の宿望ついに成れりと、思わず涙を流したという。

八月十七日以来、この土の上は、若人の勝利を決する場所となった。全国十九地方を代表する十九人の二壘手によって、この土は、掘り返され、また踏み固められた。しかも、その中の十五人は、旬日を出でずして去って行った。

そして、ぼくは、残った他の三人の選手とともに、全日本ビッダーフォアアのチームの二壘手として、三たびこの土を踏む光栄を得た。あと二試合、なんとかして勝ちたい。八月二十一日、最後の栄冠を目ざしてぼくたちは強豪Nチームと戦いを交えた。しかし、さすがにNチームは強かった。奮闘したが、ぼくたちは大敗を喫してしまった。実力の差はどうすることもできない。はるかに力が及ばなかったのだ。どろにまみれたユニフォームのちりを拂い、本壘の前で、相手の勝利を祝福して、明らかいほおえみを交しながら一礼した。

試合は終わった。全力を盡くした者のみの感ずる満足が心の上をよぎった。しかし、振り返って二壘の方を見やった時、來年まで、懐かしいこのグラウンドともお別れなのだという氣持が、ふと浮かんだ。その時、だれいとなしに、

「土を持って行こう、記念のために……。」

ぼくは、二壘の方へ走って行った。一握りの土が、手ぬぐいの中におし包まれた。

その日からもう数十日もたってしまった。さわやかな秋の氣候と自然が、ぼくの周囲をとりまいてゐる。

ひとかんの土も、しみじみとした反省をうながすすがとなつてゐる——なぜ敗れたか。体力の劣勢か、いな。氣力の不充実か、いな。練習の不足か、いな。打撃の不振、守備力の貧困か、いな、いな。たゞ、チームワークの欠如のみ。

校舎の焼失による分散授業、食糧事情による合同練習の皆無、新チーム結成の時期の遅延、原因はいろいろあるが、結局、心のチームワークが熟さなかつた不幸、それが勝利への道をはなむ最も大きな素因であつたのだ。

しかし、來年こそは——と考える時、ぼくには、ぼくの——とした希望がわきあがつて來る。

思い出の土は、ぼくのかたわらにも、ほかのナインのそばにも同じようにある。一握りの土によって、深く強くつながる心と心、そこから再び出なすぼくたちのチームには、ことし以上の力が、必ず恵まれるに違いない。

三 文化と教養

文化というと、なにか享樂的、娛樂的、少なくとも快適なもの、したがって私たちの生活に附隨的從屬的なもので、欠くべからざるもの、本質的なものではないかのように考えられる場合があります。それどころでなく、そう考えるのがむしろ普通であるかもしれませぬ。文化映画・文化雑誌・文化住宅・文化生活などという場合はそうだと思います。戦時中ある有名な新聞記者のかたが、文化はネクタ

イのようなものだ、戦争の間はやめた方がよいと書いておられたのを私は記憶いたしております。文化というものが生活に附随するぜいたくなものだとしますと、これは非常に適切な比喩^{ひよ}であります。確かにネクタイはあってもよく、なくてもよいものです。夏などは着けない方がかえって衛生的でよろしいかもしれません。文化というものが私たちの生活にとって本質的なものでなく、従属的なぜいたく物であり、したがって人心を懦弱にし、犠牲心とか剛健の精神とかを阻害するものでありますならば、戦時中はやめるのが当然であります。たゞ問題は文化というものがそういうものかどうかという点であります。

文化というのも教養というのもいずれも訳語であります。語源は耕作という意味であります。文化といえば耕作された自然として自然に対して用いられます。例えば原野は自然ですけれども、田畑は文化であります。野草は自然であっても、野菜は文化であるといえます。ところで私たちは耕作いたしませんのに、手あたり次第むちゃくちゃに土地を掘る人はなく、それでは耕作ではありません。耕作といえは、まずはじめに形を心に持っていて、それを自然の中へつくりこむこと、いいかえればその形にしたがって自然を形づくることであります。人間は肉眼でも物を見るだけでなく、心でも見ることであります。心で見た形を觀念とか、觀念が指導的統一的な力を持った場合には理念とか、イデアとか名づけますが、そういう形を外につくり現わしたものが文化であります。だから文化は精神の表現だといえると思います。精神は生命力を基盤としてその上に成り立つものでありますから、文化は生命力の表現であるといえます。日本文化は日本民族の生命力であります。したがって宗教でも藝術でも学問でも文化であります。法律制度も経済組織も文化であります。かゝる種類のものだけでない、私たちの日常生活と直接に関係している電信・電話・道路・鉄道・家屋などのようなものでも人間精神の表現としてすべて文化といえるのであります。くわしくいえば心で見た形を自然へつくり入れ、できあがったものを文化財といい、形の意味する価値を文化価値といえます。文化とはかゝるものだとしますと、それは人間生活に本質的なもので、決してネクタイのようなものでなく、戦時中でもないやめられるものでないことは明らかであります。

二

かように文化というものは人間精神の表現として、人間のつくったものであります。いったんつくられると、つくった人間を離れて独立の存在となります。例えばキリスト教はナザレのイエスのつくったものだといわれますが、イエスがはりつけになっても、ユダヤ民族が離散しても、キリスト教はそれとは独立に存立してあります。そうして人間によってつくられた宗教が人間をつくる力を持っているのであります。学問や藝術についても同じであります。なお文化の非常に特別な性質は多人数がそれに参加しても、各人の受け取る分が減らないどころでなく、かえってふえるとさえいえることであります。物質は分けると減ることは申すまでもありません。百円をふたりで分けると五十円ずつとなり、四人で分けると二十五円ずつとなります。物質に関しては参加者のできるだけ少ないことを希望するのは人情であって、どうしても争いの起りやすいわけです。金銭については親子・兄弟・友人・親類等の間にも不和の生じやすいこと、よく人の知るところであります。物質を生活の原理とする限り不和は免れがたいと思えます。國家についても同じことがいえます。世界はどんなに廣くとも、領土にも物質にも限りがあります。物質を原理とする限り、紛議と戦争とは免れないところで

あります。

これに反して、文化は分けても減らない。例えばキリスト教はひとりて信じなければ力とならぬわけではありません。それどころではなくて、多人数で教会をつくり、ともに信仰をわかった方が、かえって力を増すともいえるのであります。聖者のめぐみは何億人の心をうるおしても盡きることもなく、減ることもないのであります。哲人の知恵についても学者や藝術家の創造についても同じであります。その光は世界を照らし、その恵沢は人類をうるおして盡きることはありません。だから文化を原理とする限り、参加者を制限し拒絶する必要はありません。したがって、もしこの世界に平和が到来できるものならば、文化という超越世界を介することによってのみ可能だと考えられます。文化はつくられたものでありながら、つくったものを離れ、独立した超越世界であります。ここでは人が所有を争う必要はありません。心からの和合をもって恵沢をわかち合うことができます。平和の原理は文化でなければならぬわけで、平和國家は文化國家でなければならぬのであります。

三

御承知のように新憲法において、「日本國民は、正義と秩序を基調とする國際平和を誠実に希求し、國權の発動たる戦争と、武力による威嚇または武力の行使は、國際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。」という「戦争の放棄」を中外に宣言したのであります。いまやわが國はひとりの兵士をも、一台の飛行機をも、一隻の軍艦さえも持たない。それにもかゝらず、文化の高い國家であることを念願しない日本人はなく、また多くの日本人はそれを期待してゐるであります。けれども、武力を全然持たないで高い文化を持っていた國家というものは歴史の上に存在しませんでした。

私たちは史上かつてあつたことのない國家、即ち武力なき高度の文化國家、権力なくしてしかも權威のある國家、逆説的にいえば、弱くして強い國家を建設しようというのであります。國家の強大な権力は武力なしには不可能であります。權威は武力なしにも可能だと考えられます。なぜと申しますに、道德力のあるところに權威はあり、武力において弱くとも道德力において強いことは可能だからであります。私はもとより國家道德を個人道德と同一視するものではありません。そこに段階の相違を承認せざるを得ません。けれども國家衰滅の原因は、決して武力や經濟力の不足にあるのではなくして、道德の頹廢たはいにあることは歴史の明証するところで、現に私たちが血涙をもって体験しつつある事實であります。國內に道理が行われて無理がなく、したがって人の和の支配する國が外敵のために滅ぼされたという例はないと思ひます。國家衰亡の原因が外になくして内にあることは古來聖賢の教えるところであります。武力や經濟力以外にも道德力という力があり、しかもこれが國力の根源であることを忘れてはならないと思ひます。平和國家は文化國家でなければなりません。文化國家はそれ故に道義國家としてのみ存立しようと考えられるのであります。道義國家は弱くして強い國といえるのであります。

そういう國家はこれまで存在しなかつたけれども、それ自身決して不可能とはいへぬと思ひます。かつ新時代は新しい國家理念を生んでも不思議はありません。いまや世界は交通運輸機關の発達によって極度に狭くされ、二次の大戦を経て全世界が共同の運命をにない、共同の新秩序を考ふる新時代になつたと思われれます。武力なき文化國家の理念はそういう新時代の新理念であつて、世界制覇の野望などよりもはるかに現実性を持つと考えられます。たゞ問題は日本民族にそういう実力がある

かということであります。ところで民族の生命力の表現たる文化は、日本民族の実力を十分に示しているといつてさしつかえないと思ひます。戦前戦時中私たちはあまりうぬぼれすぎましたが、反対に現在は卑屈になってはいはしないでしょうか。卑屈のよくないことは自負高慢のよくないのと同じで、ともに排斥されねばなりません。藝術・学問・宗教などにおいて日本民族の示した業績、外國文化を攝取して完全に自己のものとなした消化力は相当高く評價されなければなりません。それは自信と矜恃きんていを持たしむるに十分だといふべきであります。もし文化國家の建設ができぬならば、古人のいわゆる「能はざるにあらざる、爲さざるなり。」といふべきであらうと思ひます。

それならば、そういう國家の創造建設のために私たちは各自に何をなしたならばよろしいでしょうか。それには、各人が力を養い、力のある人間にならねばならぬと思われまふ。少しわき道にそれますが、よく日本では女性の位置が低いとか、軽んぜられるとかいわれます。しかし力があるのに女性だから軽んじ、力がないのに男性ならば重んずるといふことがありましようか。事実、力のある婦人方はそれ／＼の範圍において敬重されています。もしわが國で女性が男性に比して一般にその地位が低いといふならば、それは女性の力がおしなべて男性に及ばぬからだと思ひます。それでは人間としての力とはどういふものでしょうか。力のある人といふと、知力とか財力とかを持った人がまず考えられます。知力や財力は確かに力であります。体力もそうであります。しかし、人間としての力の根本は道徳力でなければなりません。独立の生活の當める程度の財力、体力(健康)、知識技能力、道徳力が人間としての力を成り立たせているといえるのでありましよう。もとよりこれは一つの人格力なのですが、分析するところいう要素が考えられると思ひます。力ある人間たるためには道徳力が根本であり

ますが、道徳力の中核をなすのはよき心構えであります。これが人格のかなめであります。眼目であります。よき心構えがなければ、知識技能力も体力も、財力も人間の力とならぬことはいふまでもありません。それどころでなく、勇氣とか忍耐克己のごとき古來尊重されて來たもの／＼の徳であつても、よき心構えを根底としてはじめて徳であり力でありうることは、勇氣のある盜賊などは社會のやつかいものであることを考えてみれば事理明白であります。

それではよき心構えさえあれば十分かというに、よき心構えはぜひともなければならぬ條件ではありませんが、十分な條件とはいへません。思考は人間の偉大性でありまふが、考えたことのまちがうことのあるところから、いろ／＼な悲劇が生まれて來ます。多くの非合法な事件なども当事者はよき心構えからした良心的な行動かもしれませぬ。私たちは良心的だといつて安心しているわけにゆかないのであります。自分のよしとなしたことが眞によくなければならぬ。即ち、主觀的によしとしたことが客觀的によくなければならぬのであります。それには良心に理知と思慮とが伴わなければなりません。したがつて教養が必要となつて來るわけでありまふ。それで教養について述べることにいたします。

四

教養(culture)は元來、耕作という意味の語であります。身につかぬ知識を雜然と持っていることではなくして、耕された心だといえると思ひます。自然のまゝの心には、わがまゝ・怠惰・嫉妬しよ・妬心しよなど、いわば、いろ／＼の雜草があります。知識を血となし肉となして知性を開發し、かゝる粗野な心を超えることが教養であります。教養されない心は我欲に執着し、我欲に束縛されております。こ

れに反して教養された心は我執から自由であります。無教養も教養もさまざまの形をとって現われませんが、教養はまず思慮として重大な役目をつとめます。人は一般によきことを希求いたしますが、何がよきかは一々の場合に決断されねばなりませんから、人生において思慮の持つ役目は重大であります。もし私たちのよしと考えたことが、いつでも必ずよきものならば、人生は比較的容易だといえるでありましょう。しかし、やゝもすれば過誤を犯す危険のあるところに人生のむずかしさがあり、またそこに苦勞とともに生きがいがあるともいえます。過誤を避け中正を教えるのは思慮であり、思慮は教養によって養われます。教養はもっぱら中正として現われます。ものの考え方から姿容・服装・言語・態度・動作にいたるまで極端偏頗でないのが普通であります。これに反して、けばくしさ・おごぎょう・不自然・無作法・虚飾、例えば喜怒哀樂のおごげさな表現、強い嫉妬心、うわさずき・悪声・尊大・卑屈のようなものは、すべて無教養のしるしだといえると思います。教養人は極端でない、例えればくしいおしゃれをしない、しかし身だしなみを忘れません。人生の不幸に對して冷淡でありません、それどころでなく敏感であります。しかし、幸運にもむやみに喜ばず、悲運にも絶望いたしません。根本において我執としたがって嫉妬心を超えた自由人でありますから、他人のよきことをねたまず、自分の周囲にすぐれた人のいることをかえって喜ぶるのであり、教養とはこういうものかと思ひますが、日々つとめてやまなければ各自の器量に應じて身につけることができると思ひます。

私には人生というものはそう樂なものだと思いません。人生の目的を快樂だといたしますならば幻滅あるのみではないでしょうか。「生は悩み」ということには十分な眞理性があると考えられます。それならば悩みの多い人生とは、そもく何を意味するのでありましょうか。人生の意味に関する私見をもつてこの話を終りたいと思ひます。私の考えでは歴史は神意の実現される場所であります。しかも、神意はひとりでに実現されるものでなくて、それは人間を通じてはじめて可能であります。神意を宿しうるところに人間性の尊嚴があり、神意実現の道具となり、媒介者となることが人生の意味だと私は信ずる者であります。そうして、誠実のあるところに神意は宿ります。私たちは外面的仮象に迷わされてはなりません。はなやかな生活にも空虚なものもあり、一見みすばらしい生存にも神意を宿す充実がありうるわけであります。誠実のあるところに神意が宿り、人生の意味と光榮とのあることを信じ、それくの持ち場において誠を盡くしたいと思ひます。

(天野貞祐の文による)

四 芭蕉の名句

山路来て何やらゆかしすみれぐさ

これは「野ざらし紀行」中の句である。芭蕉は奈良で二月堂の水取りの行事を拜観し、京都を経て大津に向かった。この句は京都から大津に出る山路での吟だという。山科から小関越でもして行ったのである。あまり人も通らないさびしい山路である。そこに小さなかわいらしいすみれの花が咲いている。だれに見られ、だれに賞されようというのでもない。たゞ自然の催しのまゝに咲き出た花である。それが芭蕉の目にはこの上もない美しさに映った。いや美しいというよりも、それはむしろ奥ゆ

かしい感じである。路傍にふとこの一茎の花を見出だした芭蕉の心は、全く「何やらゆかし」という思いにしみくくと満たされて行ったのである。

「三冊子」によると、はじめ上五は「何となく」であったという。また一本には「何とはなしに」ともなっている。それを後に「山路来て」と改めたのである。初案ではあまりに説明にすぎるきらいがある。山路のさまをそのままに敘した方が、ゆかしさの情を深めるのに効果的である。

閑かさや岩にしみ入るせみの声

「奥の細道」の旅中、羽前の立石寺にもうでてよんだ句である。紀行の本文には、「山上の堂に登る。岩にはほを重ねて山とし、松栢年ふり、土石老いて、こけなめらかに、岩上の院々とびらを閉ぢて物の音聞えず。岸をめぐり、岩をはひて佛閣を拜し、佳景寂寞として、心澄み行くのみ覚ゆ。」とある。塵寰を離れた山寺の境内は寂寞と静まりかえって、物音一つも聞えない。まことに心も澄み行くような思いがする。ありからその寂寞を破ってせみが鳴き出した。芭蕉がこの寺にもうでたのは旧暦五月のことだから、まだはつぜみのころである。せみの声といっても眞夏のようにやかましく鳴き立てたのではない。おそらくはたゞ一匹のせみであったのだらう。けれどもとにかく全山の静けさはそれで破られたのである。しかも、それは決して静けさをかき乱すものではなかつた。じつと耳を傾けてみると、そのせみの声はこの静寂の中に溶けこんで、やがてそらの古びた大きな岩の中までしみ入って行くように感ぜられるのである。

なおこの句は「初蟬集」などには「さびしさや岩にしみこむせみの声」と出てあり、これが初案の形であつたと思われる。もとよりさびしいとも感じられたのであろうが、「閑かさや」という端的な表現を芭蕉は最後に選んだのである。また「しみこむ」より「しみ入る」の方が、一筋に深められて行く静けさが感ぜられる。

白露をこぼさぬはぎのうねりかな

これは、「芭蕉庵小文庫」や「類柑子」などには、上五が「白露も」とあるが、どうしてもをでなくてはならぬ。

露もたわゝに置いたはぎの枝がしなやかにたわんでいる。それがあかきかの微風に、うねりと動く。しかも白露はこぼれもしないのである。そうしたはぎの細枝のいかにもなやかな、そして静かな動きを、「白露をこぼさぬ」ということばで表わしたのである。それが「白露も」であると、こぼれやすい露さえも落さないという合理的な判断が加わることになる。いわゆる物事をこわつた言い方で、そこには美に対する感情として不純なものが混ざる。こゝはどうしても「白露を」とすなわな言い方でなければならぬ。それは合理的な説明ではない。はぎの枝が柔らかに静かにうねりゆらぐ美しさを、葉に宿した白露をこぼさないというところに感得したのである。それははぎのうねりのしなやかさ・柔らかさ・豊かさ・こまやかさに、深く見入った心にあのずから浮かんだことばであつたろう。

この句は画賛であると伝えられ、いかにも画賛にふさわしい句である。しかし最初は実際のはぎを見ての句であつたかも知れぬ。うねりというのとはもとより動的の姿である。しかしそれが白露をこぼさないほどの動きとしてとらえられた瞬間、柔らかに屈曲した枝はそのまま美しい線を描いて絵になつてしまふ。しかもその絵は單なる写生ではない。いわばうねりの美しさが、しなやかな線に固定し

象徴されたような絵である。それだけこのうねりということは、写生以上の深みを持っている。この一語に芭蕉の苦心を見なければならぬ。

旅に病んで夢は枯れ野を駆けめぐる

芭蕉の最後の吟としてよく知られている。支考の「笈日記」によれば、元禄七年十月八日の夜、病中の芭蕉は深更に及んで急に門人を召して、すべりに墨をすませた。そうしてこの一句を残したのであるという。それがついに生涯のかたみとなったのである。芭蕉はそのおりなお「枯れ野をめぐる夢心」とも「なほかけめぐる夢心」とも案じて、いずれがよかろうと門人に相談しながら「はた生死の轉變を前に置きながら発句すべきわざにもあらねど、よのつねこの道を心にこめて、年もや、半白に過ぎたれば、いねては朝雲暮煙の間をかけり、さめては山水野鳥の声に驚く、これを佛の妄執と戒めたまへる、たゞちに今の身の上に覚えはべるなり。この後はたゞ生前の俳諧を忘れんとのみ思ふは。」(笈日記)と返す／＼悔んだという。臨終のおりまでも絶ちがたい風雅への執着をみずから嘆じたのである。しかしこうして重態の病床にありながらも、一句の上を思いをひそめるといふのは、芭蕉にとつては実に「これさへ妄執ながら、風雅の上に死なん身身の道をせつに思ふ。」(枯尾花)が故であった。所詮風雅に徹して生きるほかに道のない自分であることを芭蕉は知っていたのである。このいわゆる妄執とともに一生を終ることは、むしろかれの願うところであった。

芭蕉は今旅に病んですでに死と対している。さまざまの思いがかれの胸には浮かんだことである。しかしその中でも何よりも強くかれの心を動かすものは、風雅への愛着であった。このたびは西は筑紫のはてまでも極めようと思立った旅路も、まだ半ばにも達しないうちにむなしく病にふさねばならなくなった。再びいえてわらじを踏みしめることもおぼつかない。そう思うと、夢のうちにもなお心は枯れ野を駆けめぐるのである。旅に對する強い執着が、恐ろしいほどの力で言い表わされている。一生を詩にやせ旅に終った芭蕉の最後の句として、まことにふさわしい一句である。

(頼原退藏の文による)

うめが香にのつと日の出る山路かな

ほろ／＼とやまぶき散るか滝の音

さみだれの空吹き落せ大井川

朝露によごれて涼しうりのどろ

赤々と日はつれなくも秋の風

荒海や佐渡に横たふ天の川

初しぐれさるも小蓑をほしげなり

いざさらば雪見にこるぶところまで

五 乙女峠の富士

どこかで掛時計がのどかに正午を打っているのを聞きながら、さびしい仙石原村の宿を出はずれて御殿場道にかゝると、急に日の色が薄れるように思った。シャツ一枚の汗ばむはだがひやりとした。宮の下でちよつとのところまでバスをのがした私は、二時間も間があるという次ののを待つことができ

ず、そこから一里半ほどの道をずっと足ばやに登って来た。見あげると天心に淡い巻雲が廣がって来て、それが日の光をさえぎっている。山の上のきびしい大氣もひしと感ぜられる。しかし、ようやく行手に迫った外輪山の峰々をかざる空は青く暖かに晴れている。雲のかゝらぬうちと、私はまた足を速めた。つえの石突きが石をはじいてから／＼と鳴る。

道はたの小さなからぼりの岸にすわって、ひとりの若い農婦が静かにやぎに草を飼っている。南は廣く緩く傾いて遠くまで開け、そのはてはまた次第に盛りあがって一帯の丘を成している。見たところ畑にも道にも人影はない。初冬の山村はうつろな明かるい空氣の中に低く平らに静まり返っている。道はやがて雑木林に入り、ところどころかえでのみじが血の色をしている。からすがどこかの枝にいて一声二声鳴くのがあたりにはひびき渡る。少しづつ登りになり、左右とも針葉樹の林になる。ひのきの林が立ち木のまゝ皮をはがれた所がある。南側の斜面の松原を開いて数町も畑にしてある。切り株を残したまゝ麦がまかれていて、一條二條煙が立っているが、人は見えない。その向こうにはゴルフリンクの枯れ色が廣がっていて、その上にとろどろにうしが草をはんでいる。

暗い杉山の下に「乙女峠道」と白いくいの立つ所へ来て、右へ折れて山道にはいる。木立の間から峠が真上に見あげられる。まもなく杉林は盡き、半ば葉を落した雑木の疎林の中に石ころの道がじくじぐについている。たちまち息苦しくなり、背にも額にも汗が流れる。しかし、やがてからだじゅうにいいような不快感がわき、精神も快く興奮して来る。急にさま／＼な思いが力づいて生き／＼と心を駆けめぐる。こうして山に登ることもずいぶん久しぶりだ。日の照る石ころの道、枯れ草の色、あえぐ息づかい、あゝこれだなと思う。今登って来た仙石原のながめが眼下にだん／＼開けて来るのを

見やりながら足をとめずに登る。仙石原を隔てた向こうには駒が岳が大きく伸びあがって来た。

二十五分ほど登った時、急に頭上にかすかに人声がした。立ちどまって見あげるともう頂に近い。その枯れ草の中に群童の影がさす。遠足かもしれない。私は汗をぬぐい、一息つき、下をながめた。駒が岳のすそには蘆の湖の水の色が少し現われて来た。また歩き出し、いくらも行かぬうちに急に目の前が開け、思いもかけずちやうど目の高さの道の上に、真向かいの空に遠く白く輝く頂を見た。私は残る数歩を登りもやらず立ちどまったまゝ、その光を見つめた。

私は小走りに出て行って、峠の平の端にある腰掛に腰をおろし、背負袋もそのまゝ、くぬぎの木立をすかして、しばし銀のみねをながめていた。

あわ／＼と薄ら日の光がさしている廣い静かな天地の中に、空にとゞく一所だけが白く凍ったように輝いている。明らかかな形を空中に刻んだ峰が何もない大きな空間を隔てて、私に向かつて目の前にそこにある。今雪を振りかけたと思われるあたらしさで、頂からは幾筋かのあい色が下へ流れている。取りつく島もない無言の沈黙が天地を領し、私はそのけはいにのまれていく。その清い峰を下から押し包むように、厚い綿雲が中腹を巻いている。綿雲の端は北の空へ濛々となびいて、そのがわのすその形を隠してしまっている。

頂から上は高く晴れて白いかすかな巻雲を浮かべ、それが流れて私の頭の上まで続いている。綿雲の巻いた下は雪はなく、暖かく黒ずんだすそ野がたゞ大きく遠く一面に廣がっている。南のすそはささざるものなくどこまでも緩やかに流れて、その末は愛鷹山の続きが、これは少し日を負うて黒く盛りあがっている。北の方を見ると、甲州の山々が赤ちゃけた枯れ色にはてしなく波うち、その上に圍

團と積雲を横たえている。そのまた奥の天際には、また雪もない信濃しののへの山々が見え隠れしている。あかず、と見こう見しているうちに、右手の小高い所に集まっていた遠足の隊は、私のいる横の道をさぐめきあって御殿場がわへ駆け寄りて行った。引率の若い先生は私とちよつとあいさつをかわし、新しい軍靴ぐんかを鳴らして生徒を追って行った。

私は毛編みの上着を出して引っかけながら、今までわらべどもいた草原へ登って行った。たゞ元氣なまゝのかれらが去った跡には紙くずが散らばって狼藉ろうせきを極めている。そこからは内側のながめもあつて火口丘と火口原が見渡せる。時計は一時をちよつとまわっている。私は弁当の包みを出してひなたの枯れ草の上に腰をおろした。そうしてみると富士はすゞきの穂の間に隠れてしまふ。それにもう少し南へ移れば、愛鷹山の向こうには海が見えるはずだ。そう思ってまた背負袋をさげて立ちあがった。目の下の、さつき私がい峠の道にひよつこりとひとりひとりの獵師が黒いいぬを連れて現われ、また仙石原へ向かつておりて行った。

私は尾根傳いになお南へ登って行った。もう行き会う人もなかった。短いくまざさの中の道には、りんどうが色あせた花を着け、あざみが白く立ち枯れている。灌木かんぶの茂みの中にやぶこうじのあかい実も見た。丸岳の雑木林を抜けるとまた廣い草場となり、ながめが開けて来る。だら／＼と南へくだる道の左手には蘆の湖が全景を現わし、駒が岳はや／＼傾いていよ／＼大きく、右手には愛鷹山の肩越しに駿河湾すまがわが白く光って空につらなっている。沼津の海も見え、その向こうには伊豆の山々が幾重にも重なって見渡せる。

どこを見ても黒ずんでさびしい。山々は黒い不吉な影を作つて波うっている。その蕭條しょうじょうたる天地の

間に、たゞ白銀の富士だけが天際にいよ／＼明かるく光っている。

富士のうなじを巻いた綿雲の上のへりが毛ばだつて、しきりに動くようだ。時にはそのひとひらがなびいて頂の形を隠しそうにもする。その綿雲がすそ野へかけて因く大きく影を落している。その影の中に二所ほどかすかに明かるいのは、雲の切れ目があるらしい。すそ野の一带に黒ずんだ色の中にも、かっ色の草野とあお黒い森とが見分けられる。模様がこまかくこみいった所は村落である。その間にところどころ並んだ筋が見えるのは耕した跡である。小さな光る鏡は貯水池である。白い煙を揚げている所もある。

そのうちに頂の雲の動きがにわかにかつばつになったように思った。立ちのぼる雲のきれの幾つかは競い合うように見る／＼輝く峰を押し包み、そのはるか上までのぼつて高い塔を築いた。私はなおしばらく見守つたが、塔はもう崩れそうもなかった。富士はいま隠れたらしかった。

私はその道の上に袋や帽子やつえを投げ出し、弁当の包みを開いて並べ、そのそばに寝そべつた。二時に近い。こうしていると、山の上の日ざしはほちやくびにあつく感じられる。私は黒い山ひだの間いたゝえた無気味な蘆の湖を見、また振り返つて雲を深くかぶつた富士をながめた。雲はさつきよりはまた厚く重くなった。

弁当の包みの中にあつた一本のたばこをすいなながら寝ころんでみると、時おりかすかな風があたりのかまざさを鳴らして過ぎる。その音がやむと急にひっそりとして何も聞えなくなる。小鳥の声ひとつしない。ふもとの村の音もこゝまではとどかない。私はや／＼傾いたさびしい日ざしを浴びながら、あら／＼しく起伏する大地のこぶの一角にぼつんと取り残されているのだと思つている。手足は快く

疲れ、心は静かに落ち着いている。

これらの山々はあの遠い低地の人里に何かあるのかまるで知りもしない。私がいくら目を凝らして見たところで、たゞ遠く一面にかすんだものしか映らない。耳をそばだてもなんのけいも聞きとめることはできない。あそこには何かがあるのだろう。私に見えるのは、高い冬の日と、その光に照らされた黒い大地と、その間の廣い空虚を歩き來する白い軽い雲とだけだ。しかし、この山だつて永久に変わらなかつたのではあるまい。いつか地の底から火となつて噴き出し、やがてそれがさめて石となり土となり、草を生やし生き物を住まわすようになつたのだろう。またその昔は、地表がくまもなく煮えたぎつて、その上を暗く雲霧がとざし、雨風が絶えまなく荒れ狂つていたのだろう。更にその先は、巨大な一塊の灼熱したガスだつたろう。この遠い長い変化の中では人間のきょうあすのごときは無に等しいので、その長い／＼律動を測る感覚を私たちは持たない。この奇怪な想像はほとんど私たちを絶望させる。

しかし実はその反対に、私もこの想像の世界のように悠久に長く遠くなつたと考えてひそかに慰められる。

しかし私は決して山になつたのではない。私はやはりこゝにひとりうずくまつて考えている者だ。私はまもなく立つてふもとへおちりて行かなくてはならない。私はきのうまでのようにまた人々と心から話を交し、まじめに活計に心を勞し、こんな感想もたちまち忘れてしまふほかない。私はふもとにあるものをかすかな小さなものと思つてゐる。しかし、ふもとの人里から見れば、山の上のこの私はまた一匹の虫にすぎない。

もしそうだとすると――、今私がこうしてながめてゐるように、山河は果たして永久なものだろうか。永久にひとり変わり行く天地がほんとうで、人間の生死や愛憎はうそであらうか。この私は果たしてなんでもないものであるか。

そうではあるまい。実に私も山河の間にその一端片として生まれたものだ。天地の悠久な變轉の一節に私も生まれたものだ。もし天地が変わることなく嚴存するとすると、この私だつてやはりそうではなくてはならぬ。そしてその山河を永久なものとながめてゐるのはほかならぬ私の目だ。私の目が見ているのだ。いや何か知らぬがあるものがわれとわが身をながめてゐるのだ。もし私が見ないとしたら、日月も山河もそれ自身果たして壯大たりうるだらうか。山河の壯大を感じる私自身が壯大なのではないか。

今私はこゝで悠々と空想にふけてゐるけれども、日の暮れるのを恐れて、やがてあたふたとふもとへおちりて行かなくてはならない。あの一色に無事に暮れて行くような平野にはどんな不安があり、どんな錯誤があるかもしれない。私はそこへもどつて行くほかないのだし、行けばたちまち渦中にある。すべてが人のことだ。私はもと／＼人であり、そのほかのものではないのだ。人の苦しみを苦しみ、人の戦いを戦い、そして生きなければならぬ。それがあの遠い低いところに行われている法則ではないのか。人はかえつてそれを永久とも壯大とも見ようとはしない。

目はようやく傾いて、厚く雲をかぶつた富士はそのな／＼めな光の中に煙つてゐる。駿河湾は水と空とを分かつた、いよ／＼まばゆく光つてゐる。振り返ると、暮れかゝつた明神が岳はおびたゞしくまっ白な雲を吐いてしきりに吹きおろしている。駒が岳の肩にもなすつたように雲がかゝつた。一流れの

速い霧が私をかすめて冷えた空にのぼって行った。私はやらら立って身じたくをして、長尾峠目ざし
てくだりにかゝった。

(佐藤信衛の文による)

六 銀の燭台

この物語は、フランスのピクトルユーゴーの作である。かれは社会の動搖の激しい時代に生まれ、詩人
としてはロマンティック運動の主唱者であり、政客としては民主派であり、熱情の人であった。かれは当時
の社会の底にうごめき苦しんでいるみじめな人たち(レミゼラブル)のことを考え、またこのような人たち
を生み出した社会の欠陥をとり除こうと願っていた。そして五箇年間の努力によって、これを書きあげた。

本課は、長い小説「レミゼラブル」の一節をとりあげたのであるが、この文の中からも作者の意図する
ものをうかがうことができるであろう。われ／＼は、このような長い作品を読破する力を養って行かねばな
らぬ。中途であきてやめてしまったりしないように、読書の喜びと価値とを体験して行きたい。本課の読後
感を相互に発表したり、また脚色したり、時には演出してみたりすることも、おもしろいであろう。

一八一五年のある日の夕暮れ、ひとりの旅人が、てく／＼とディーニュの小さな町へはいつて来た。
窓ぎわや、入口にいた二、三の人たちは、うす気味の悪いこゝちでこの旅人をながめていた。こんな
おちぶれた様子をした通行人は、ほかにあまり見当たらない。中背で、骨格のたくましいじよ

うぶそうな男であった。縁のだらしなくさがった革の帽子をまぶかにかぶっていたが、顔は、日や風
にさらされて赤くなり、汗がたら／＼流れていた。毛深い胸は、えりもとで小さな銀の金具でしめたあ
らい黄色いシャツの上からも、よく見えた。なわのようによれた青いネクタイと、切れてみすぼらしい
そまつな青ズボンと、片側はもえぎの小ぎれを当てる麻糸で縫いつけた、古いぼろ／＼なねずみ色の職
工服とを着けていた。背中には中みの相当にはいつているはいのうを背負って、手には、恐ろしく太
い節だらけのステッキを持っていた。足は、くつ下もはかないで、底に大きなびょうの打つてあるく
つをはいていた。そうして、長いひげを生やしていた。

その疲れた様子から見ると、この男は、一日じゅう歩いてきたに違いない。この町の下町の方の女
たちの中には、この男が、町はずれの木の下で休んだり、清水のわく所で水を飲んだりしたのを見
た者があつた。あとをつけて行った子供の話によると、ものの二百歩も行かないうちに踏みとま
つては、また、市場の井戸で水を飲んだりしたことである。よほど、のどがかわいてはいたに違
ない。

旅人は、市役所の前まで来ると、そこへはいり、十五分ばかりして出て来て、今度は一番りっぱな
宿屋の方へ足を向けた。そうして、その表通りに面した台所へ、すぐにはいつて行った。なべ類
は、盛んに湯げをたて、かまどの火は、強いいきおいでばち／＼と燃えていた。料理番のかしらを兼
ねている宿屋の主人は、隣のへやで声高に笑ひ話をして四、五人の馬力たちのために、おいしそ
うな料理をこしらえていた。ひどくいそがしように、火の方へ行ったり、なべの方へ来たりしてい
た。肉のはち切れるようなモルモットや、そのまわりに並べてある小鳥や、がちょうは、長い焼さく

しにまるくなっているし、なべの中には、二匹の大きなこいと、一匹のますが料理しかけてあった。

主人は、戸があいてだれかはいって来たのを聞きつけたが、なべから目をあげもしないで、

「お客様、何をさしあげましょうか。」と言った。

「何かたべるものをください。それからとめてくれませんか。」

「おやすい御用です。」と、主人は言ったが、頭を向けて旅人の方を一目見た時、

「お金さえいたれば。」とつけ加えた。

「金は持っています。」

「さようでしたら、なんなりともさしあげます。」

旅人は、ポケットから財布をちよつと出しかけたが、どうしたのか、また、ポケットにそれを入れてしまった。それから、はいのうをおろして入口の近くへ置き、ステッキをついたまゝ、火のそばの低い腰掛にかけた。けれども、主人は、行ったり来たりしながら、旅人を注意深くながめていた。

「飯のしたくはすぐできますか。」

「はい、たゞいま。」

この客が、火に背中を向けてあたっていた時、主人は、ポケットから鉛筆を出して、古紙のはしに何か一、二行書いてたゞみ、それを給仕に渡した。それから一言耳打ちしたが、給仕は、すぐ市役所の方をさして駆けて行った。

旅人は、こんなことには少しも気がつかないで、また、二度めの催促をした。

「したくはできましたか。」

「はい、もうちよつと、どうぞ。」と、主人は言った。

給仕は、紙を持って帰って来た。主人は、急いでそれを開いて気をつけて読んでいる様子であったが、それから、首を傾けてちよつと考えていた。けれどもすぐ、取り乱したように何か考えにふけている旅人の方へ一足進んで、

「あなた、お氣の毒ですが、おことわりいたします。」と言った。

旅人は、中腰に立ちあがって、

「なぜですか。私が金を拂わないと思つてですか。それとも、前勘定で拂えというのですか。私は、金は持っていますよ。」と言った。

「いや、そういうわけではございません。」

「それじゃ、どういうわけですか。」

「あなたは金は持っておいででしょうが……。」

「持っていますとも。」

と、男は言った。

「だが私の所には、へやがないのです。」と、主人は言った。

男は落ち着いて口を開いた。

「うまやでもいい。」

「でもおことわりいたします。」

「なぜできないのですか。」

「うまが、いっぱいはいっていますから。」

「そう、それなら、物置のすみでもけっこうです。わらが一たばあればよいのですが、そんなことは食事の後にしましょう。」

「どうも、御飯もあげることができません。」

これを聞いて、旅人は立ちあがって、

「は、あ、ふ、ん……。だが、私は腹がすいてたまらない。朝から歩き通した。三十五、六マイルも歩いた。代は拂うから、何かたべるものをお願いしたい。」と言うと、主人は、

「みな、おあいにくさまです。」と言った。

旅人は、せ、ら笑いをしながら、かまどや、なべの方へ向いて、

「何もない。こゝにこんなにあるじゃないか。」と、あら／＼しく言った。

「それは、みんなあつらえものです。」

「だれの。」

「その人たち、馬力屋さんたちの。」

「幾人いる。」

「十二人。」

「二十人分もあるではないか。」

「それは、みな注文されたもので、もう前勘定でいたゞいてしまったのです。」

男は再び腰掛けて、今度は声を静かにして、

「私は宿屋にいるのだ。腹がすいている。こゝを動きはしない。」と言った。

すると、主人は、旅人の方へからだを伸ばして、低い声ではあったが、人をちとみあがらせるような調子で、

「出ておいで。」と言った。

旅人は、鉄の石突きに附いているステッキで、火の燃え残りをかきまわしていたが、このことばを聞くと、急に向きなおって、何か言おうとしたが、主人は、じつと男の方を見つめて、同じ調子で言った。

「よせ。もうそんなことはしなくともいい。おまえの名を言ってみようか。おまえはジャンリヴァルジャンだろう。おまえがどんな人間だか、もうちゃんとよく知っている。おまえがはいって来た時、どうも少し怪しいと思ったので、市役所へ使をやって聞き合わせたのだ。これがその返事だ。おまえ、字が読めるかい。」

こう言って、主人は、市役所から来たばかりの開いた紙を男の方へ突き出した。男は、それをちらと見たが、手に取りもしなかった。主人は、ほんのちよつと黙っていたが、やがて、

「出ておいで。みんなに、ていねいな取り扱いはするのだが、私の流儀だから。」と言った。

旅人は、頭をたれ、はいのうを取りあげて、出て行った。いたましい肩身の狭い人のように、小さくなって、あてどもなく歩いて行った。一度も振り返っては見なかったが、もし振り返って見たならば、宿屋の主人が戸口に立って、そこへ寄り集まった客や通行人といっしょに、うしろ指をさしながら、いろ／＼と話し合っているのに気がついたであろう。こわさと、いやな氣持をこも／＼表わした

その人たちの表情から、かれがこゝへ来たことがすぐ町じゅうのうわさになるだろうということにも、気がついたであろう。けれども、この男は少しもそんなことを知らなかった。悩みのある人間には、あとを振り返って見るひまなどは、もちろんないものである。

この男は、しばらく、疲れも忘れてとぼ／＼と歩いてしたが、にわかには飢えの苦しみを感じた。夜はもうせまっていた。どこかとまる所はないかと思わずと、ちょうど、その道のはずれの方に、あかりが一つ光っていた。よく見ると、このあたりは居酒屋からもれたものであった。

旅人はちよつと立ちどまった。そうして、小さな窓から中をのぞいて見ると、酒場の低いへやの中には、小さなランプが一つ、テーブルの上についていて、かまどには、火がいきおいよく燃えていた。幾人か飲んでいる者もあったが、主人は火にあたっていた。鉄なべは、火の上にかゝって煮えたっていた。

この酒場の入口は二つあって、一つは表通りからと、もう一つはごみだらけの小庭からとであった。この男は、表通りの入口からはいる勇氣はなかったので、こそ／＼と小庭の方へまわって、また、一度立ちどまった。それから、こわ／＼戸の掛けがねをはずして、戸をあけた。

「どなたでございます。」と、主人は声をかけた。

「夕飯ととまりを願いたいのですが。」

「かしこまりました。夕飯とおとまりなら、こゝでできます。」

旅人は中へはいった。飲んでいた人たちは、みんなこの男の方を振り向いて、この男がはいのうをおろすのを注意して見つめていた。顔が、一方からはランプで照らされ、一方からはかまどの火で照らされていた。

「こちらに火があります。夕飯は、今なべの中にしたくしておりますから、こちらへ来ておあたりなさいませ。」と、主人は言った。

旅人は、火の近くにすわって、疲れはてた両足を火の方へ伸ばした。なべからは、うまそうなに音が漂って来た。縁のさがった帽子の下から見えるだけの様子では、その顔は、いかにも氣持よさそうであった。

けれども、テーブルに着いている人たちの中に、あの宿屋の主人といっしょに入口で大騒ぎをした馬力のひとりがあった。この馬力は、酒屋の主人を手招きして、自分の所へ呼び、何か低い声で、二三言、話し合った。

すると、酒屋の主人は、火の方へ帰って来て、あら／＼しくその男の肩へ手をやって、ぶあいそうに、

「こゝから出て行ってもらいましょう。」と言った。

旅人は、振り向いて、静かに、

「あゝ、あなたは知っておいでですか。」と言った。

「そう。」

「みんなは、私を、あっちの宿屋から追い出したのです。」

「それだから、今度は、私たちがこゝから追い出すのだ。」

「では、私はどこへ行けばいいのですか。」

「どこか、ほかへ。」

この男は、ステッキとはいのうを取りあげて、また出て行った。そうして監獄の前を通った。入口に呼びりんの鉄の鎖がさがっていたので、それを鳴らすと、格子戸があいた。この男は帽子をとって、ていねいに、

「牢番さん、今夜一晩、私をこゝへとめてくださいませんか。」と頼んだ。

「監獄は、宿屋でも酒屋でもない。しばらく置いておいで。そうしたら入れてやろう。」返事はこうであった。格子戸はしめられた。

夜は、ずん／＼せまって来た。寒いアルプスおろしが吹き荒れていた。だん／＼消えて行くうすあかりに、道に面した庭の中に、しばで作った小屋が一つ見えた。旅人は、大胆にも木のかきを飛び越えて、庭の中にはいった。そうして、その小屋へ近寄った。戸は狭くて、入口は低かった。これは道ぶしんの入夫でもこしらえた掘立小屋によく似ていた。こういう小屋は、ふだん、夜は人のいないものである。旅人は、しゃがんでその中へもぐりこんだ。中は暖かで、氣持のいいわらまで敷いてあった。かれは疲れのため身動きもしないで、この寢床の上でちよつと休んだ。背中のはいのうがじゃまでもあったし、またちよつとまくらにもよかろうと思つて、その革ひもをはずしかけた。その時、たけだけしいぬのうなり声がした。見あげると、小屋の入口に、恐ろしいブルドッグの頭が見えた。これは犬小屋であったのだ。そこでかれは、ステッキをつかんで、はいのうを盾に構え、できるだけうまく、犬小屋からぬけ出した。そうして、庭に出た。けれども、かれのぼろ／＼になった着物のほ

ころびは、更に大きくなってしまった。

かきねをよじのぼつてしまうと、また、もとの道であった。あのそまつな犬小屋のわらの寢床からさえ追い出されて、自分の身を休める所としては、どこにもないのに氣がついた。石の上へ腰を掛けるというよりも、むしろ身を投げるようにして、

「私はいぬにも及ばないのか。」と嘆いた。

それから、また、立ちあがって、てく／＼歩きはじめたが、かれは、町から出はずれたら、その辺の木の下か、乾し草の下で、身を隠す所ぐらひは見つかるだろうと思つて、首をうなだれて、しばらく歩いて行った。もう、よほど歩いたと思つた時、目をあげて、自分のまわりを見まわした。かれは野原にいたのであった。目の前には、もう取り入れもすんで、刈りこみをした頭のように、かり株でおゝわれた、低い小丘があった。自分の二、三步先にたゞ一本、おかしな木が立っているだけで、この野原の中にも、丘の上にも、何一つなかった。あたりがいかに荒れはてて、ものさびしかったので、旅人はちよつと考えたが、急いでもとの道へ引返して、また、町へ足を運んだ。城門はもうしまつていたので、古い城壁の崩れた所からはいった。もう、夜の八時ごろであった。町の道筋を知らなかったので、あてどなく、やたらに歩いて行った。この町のすみには印刷所があつたが、かれは、もう疲れはてて、欲も望みもなくなつてしまつて、この印刷所のある石の腰掛に横になつた。

ちよつどその時、ひとりの年とつた女が、教会から出て来た。女は暗やみの腰掛の上に人が寝ているのを見て、

「あなた、そこで何をしておいでなさるのですか。」と言った。

男は、腹立ちまぎれにとげ／＼しく、自分の持ちまえの調子で、

「わかっていら、ばあさん、寝るのだよ。」と言った。

「腰掛の上で。」と、女は言った。

「私は、十九年の間、一枚の板ぶとんの上に寝たのだ。今夜は石ぶとんだ。」と、男が言った。

「あなたは兵隊さんですか。」

「そうだ、ばあさん、兵隊さんだ。」

「なぜ、宿屋へおいでなさらないのですか。」

「金がないから。」

「あら、まあ。私の財布には四スーしかありませんが。」と、女が言った。

「それでもいいから、こちらへおくれ。」

男は、その四スーを受け取ったが、女は、なおことばを続けて、

「そんな少しの金では、宿屋へとまることはできません。でも、もう行ってごらんになったのですか。

こゝでは夜を明かすことはできません。寒くて腹がすいてお困りでしょう。みんなは、たゞでもあなたをとめてあげなくてはならないのに。」と言った。

「私は、一軒残らずまわって来た。」

「それで、どうなさいました。」

「どこでも私を追っばらったよ。」

この親切な女は、男の腕へ手をあてて、この町の向こうがわにある司教邸——司教は施療院に提供しているのであるが——と並んだ、今、司教の住んでいる小さな低い家をさし示して、

「あなたは、どこでも、一軒残らずまわられたのですか。」と聞いた。

「そうだ、まわった。」

「あそこの、あの家へも行きましたか。」

「いや、行かない。」

「それではあそこへ行ってごらんなさいな。」

二

その夜、司教は、八時ごろには、まだ何か書きものをしていた。そこへ、女中のマグロアル老女が、いつものように、寢台の近くにある戸だなの、銀の食器を取りにはいって来た。それから少したって、司教は、もう食事の用意ができて、妹もさだめし待っているだろうと思つて、ペンを置いて食堂へはいつて行った。

ちょうど、司教がはいって行った時、マグロアル老女は戸じまりをよくした方がよい、ということ話していた。老女が、夕飯の用意をするために外へ出て行った時、人相の悪いひとりの浮浪人が、この町のどこかにひそんでいるから、よく気をつけて、家の戸をしめ、かぎをかけて、まちがいの起らないようにしなければいけないということを、聞いて来たらしかった。

つめたいへやからはいつて来た司教は、火の前へすわってあたろうとした。すると、老女は、またそれをくり返して話した。

司教は、いすを半分ばかり向けなおして、そのきげんのよい顔を老女の方へ向けて、「よし／＼、一体、それがなんだというのかい。何か危険なことでもあるのかい。」と言った。そこで、老女は、また自分の話を始めた。

「この町に、氣味の悪いこじきのようなふうをして、はいのうとステッキを持って、恐ろしい顔をしたす足の浮浪人が、ひとりいるのでございます。」

「ほんとうに。」と、司教は言った。

「ほんとうでございますとも、御前様。今夜、この町で何かきつと起りますから、ごらんなさいませ。みんなそう申しております。私、今からじょうまえ屋へ行って、戸の古いかぎをなおすように言つて参りましょうか。」

ちょうどこの時、入口で戸をたたく大きな音が聞えた。

「おはいり。」と、司教が言った。

戸があいた。男がひとりはいって来た。この男はあの旅人であつた。背中にはいのうを背負い、手にはステッキを持っていた。目はものすごくかゞやいていた。かれは、両方の手を棍棒こんぼうの上へもたせながら、司教の答を待たないで、大きな声で言った。

「これをごらんください。私は、ジャン・ヴァルジャンという者です。私は罪人です。十九年の間、監獄にいました。四日前に許されたのです。この四日の間にツーロンから歩いて来ました。今晚ここに着いて、一軒の宿屋へ行きましたが、私が黄色い通行券を持っているというので、——これは、どうしても市役所へ見せなければならぬものですが——そのために私を追い出しました。ほかの宿屋

へも行きませんが、やはり『出て行け。』と言うのです。監獄にも行きましたが、牢番は私を入れてくれません。私は、犬小屋へはいこみました。すると、いぬは私にかみついて、私を追い出しました。私は、野原へ行って、星の下で寝ようと思いましたが、星は一つも出ていません。雨が降りそうでした。そこでしかたなく、どこかの人家の戸口で露をしのごうと思つて、また、町へもどつて来ました。そうして、この町内で石の上に横になつていますと、親切な女が、『あそこへ行つてごらんなさい。』と言つて、あなたのうちを教えてくださいました。それであたはずねしたようなわけです。こちらはなんでもございますか。宿屋でございますか。私は、金は持つております。どうも、ひどく疲れて、腹がすいてたまりません。とめていたゞけましようか。」

「マゴロアルさん、こゝへもう一人まえ、食事のしたくをしてください。」と、司教が言った。

旅人は、驚いて、テーブルの上にあるランプの近くまで、三足ほど進んで、

「お待ちなさい。」

と叫んだ。考え違ひをされているのではないかと思つたらしく、

「そんなことではないのです。あなたは、私の言ったことがあわかりになりましたでしょうか。私は罪人ですよ。今、監獄から出て来たばかりですよ。」と言つて、ポケットから大きな黄色い紙を一枚出した。かれは、それを拵けて、

「これが、私の通行券です。それ、ごらんの通り黄色いでしょう。これですから、どこへ行つても追ひ出されるのです。ごらんください。こゝに、『この男はいたつて危険な人物である。』と書き入れて

あります。その危険人物が、今、あなたのそばにいますのですよ。だれでも、私を追い出さない者はありません。それでもあなたは、この私をとめてくださいますか。何かたべる物を少しくださって、そうして、どこかへ寝かしてくださいることができましようか。」と言った。司教は、

「マゴアルさん、寢所の寢台に、白い敷布をしきなさい。」と言った。そうして、男の方に向いて、「あなた、すわってあたりなさい。すぐ御飯ができますから。たべている間にあなたの寢床の用意もできます。」と言った。

男は、はじめて、よくわかった。顔つきは、妙に変わって来て、氣の狂った人のようにどもりながら口をきき出した。

「ほんとうに、あなたは、私をとめてくださいますか。追い出しはなさらないのですか。まあ、私にこゝを教えてくれたあの女は親切な人だった。私は、金を持っていますから、十分にお拂いします。失礼ですが、あなたのお名まえはなんとおっしゃいますか。あなたは宿屋の御主人ですか、そうでしょうか。」

「私は、こゝに住んでいる牧師です。」

「牧師さん。では、こゝは教会ですか。そうして、あなたは司祭さんですか。それでは、金などは取りにならないのですか。」と、男が言うと、司教は、

「はい、もらいません。金はそちらへしまっておきなさい。」と言った。

マゴアル老女は、食器を運んで、それをテーブルの上に置いた。司教は、

「その食器を、なるたけ火のそばに置きなさい。」と言って、それから、客の方に向いて、

「アルプスからの夜風は、全く、つめたくてたまりません。さぞ寒かったですでしょう、あなたは。」と言った。

司教は、話をするたびに、そのやさしい親切な声で「あなた」ということばを使ったので、男の顔は生き／＼して来た。

「なんだかランプがたいへん暗いね。」と、司教は言ったが、マゴアル老女は、すぐのみこんで、司教の寢室へ行って、ストーブの上から銀の燭台を二つ持って来て、それに火をともし、テーブルの上に置いた。

「司祭さん、あなたは親切なおかたですね。私をいへつなさらないで、家の中へ入れてくださって、私のために、わざ／＼ろうそくをつけてくださいます。私がどこから来たもので、また、どのくらいはじめな目にあつたものであるかということ隠しませんでしたのに。」と、男が言った。

司教は、静かに男の手に触れて、

「あなたがどんな人であるかということ、私にお話しにならなくてもよいのです。あなたが、心をいためておいでなさるか、飢えかわいておいでなさる時には、いつでもおいでになってよいのです。それがために、私にお礼などをおっしゃるにはおよびません。第一、私の家の中へお入れするのだと、お考えになつてもいけません。こゝは、だれの家でもありません。隠れ場所のなくなつて困る人のための家です。私よりも、むしろ旅人のあなたの方が、いっそう、安心していられる所だと、御承知になればよいのです。こゝにある物は、みなあなたの物です。なんのために、私があなのお名まえを知る必要がありましよう。それに、あなたが言われない前から私はあなたの一つの名まえを知つ

ております。」と言った。

驚いたのは、この男であつた。男は目を大きくして、

「ほんとうですか。あなたは、私の名まえを知つておいでになつたのですか。」と大きな声で聞きかえした。

「知っていましたとも。あなたのお名まえは、『私の兄弟』というのです。」と、司教が答えると、男は叫んで、

「お待ちください、お待ちください。私は非常に腹がすいていたので、こゝへうかぶつたのですけれども、あなたがこんなに親切にしてくださいるので、今ではもう腹がすいているのかどうなのか、わからなくなつてしまいました。そんなことは通り過ぎてしまつたのです。」と言った。

司教は、また男を見つめながら、

「あなたは、ずいぶんお苦しみなさつたのでしような。」と聞いた。

「はい、どうも。赤い仕事着を着せられて、重い鉄の玉と鎖をつけられて、寝るのは板の上で、暑さにも寒さにも、ちよつとしたことにもむちで……これで苦しまなわけはありません。まあ、いぬ、いぬの方が、よほどしあわせです。」

「そうでしたか。あなたは、実に苦しい場所から出て來られたのです。しかし、お聞きなさいよ。あなたはその苦しい場所から出て來て、かりにも、世の人を憎んだり、怒ったりするならば、あなたは、あわれむべき人として終るのですが、そこから出て來て、りっぱな志と、親切と、おだやかな考えを持っておられるならば、あなたは、私たちのだれよりも幸福な人です。」と、司教は言った。

そのうちに、マグロアル老女は、食事の用意をした。老女は、司教の命を待つまでもなく、自分で承知して、上等の古いぶどう酒一びんを添えて出した。

司教は、晴れ々しい顔をして、いかにも愉快そうであつた。元氣のいいことばで、

「さあ、おありがとうございます。」と言った。そうして、その男を自分の右にすわらせた。司教の妹は、全く無言のまま、しとやかにその左にすわつた。司教は祈りをあげて、それから、いつもと同じように、自分で勝手にスープをついで吸つた。男は、わき目もふらずに、むさぼるやうにたべた。

「テーブルが、何か少し物足らないようだね。」

司教は、突然こう言った。

実は、マグロアル老女は、必要な三人まえだけの食器を備えたのであつたが、この家のならわしとしては、司教がだれかと夕飯をたべる時には、テーブルの上に、六人分の銀の食器をそろえて出すことになつてゐた。——つまり、罪のないみえから來たものであつた。

マグロアル老女は、それに氣がついた。一言も言わないで出て行つたが、少したつと、司教の言つた三人分の食器が、別にテーブルの上に輝いてゐた。

旅人は、振り向きもしないで、飢え死にしそうな人のように、大口をしてたべた。けれども、食事がすんでから、

「司教さん、私には、これだけでけつこうすぎますが、正直に申しますと、私といっしょにたべるのをいやがった、あの馬力どもは、あなたよりも、よほどよいものをたべています。」と言った。

「あの人たちは、私よりもほねをおりますから。」と、司教は答えた。

「いえ、たくさん金を持っているからです。あなたは貧乏です。そうですね。あなたは、司祭さんでもないでしょう。あ、神様が公平なら、あなたは、りっぱに司祭さんになれるのですのに。」と、男が言った。

「神様は、この上もなく公平ですよ。」と、司教は言ったが、少したって、

「ジャン・ヴァルジャンさん、あなたは、ポントルリエへおいでになるのだとおっしゃいましたね。」と聞いた。

「しかたなしに行く旅なのです。あすは、夜の明けるのを待ってたなければなりません。旅をするのはつらいものです。夜は寒いし、晝は暑いのですから。」

「あなたのおいでになる地方は、よい所ですよ。革命で私のうちがおちぶれた時、私は、しばらくあそこへ行って、労働して身を支えていました。仕事がたくさんあるので、困るのは、たゞ、自分でどれを選ぶかということだけです。あなたのおいでになる土地には、一つ、非常に楽しい仕事があります。それは、牛乳をしぼる仕事です。これには、種類が二つありますが、一つは、金持の持っている大牧場の仕事です。こゝには、四、五十頭のめうしがいて、一夏に、七、八千斤のチーズをこしらえます。もう一つは、山の中に住んでいる貧しい農夫たちの持っている組合搾乳所で、これは、めうしを幾匹か共同で持っていて、そのあがり高を互に分けるのです。こゝで、チーズの製造人を雇っていますが、製造人は、日に三度牛乳を受け取って、その乳量を書き入れるのです。」と、司教は話した。

司教は、これらの搾乳場は、この男にとってまことによい隠れ場所だから、それをさとってくればよいと願って、チーズ製造人のよい職業であることを、こまかに話したのであった。すると、旅人は、非常に元氣づいて来たように見えた。

お茶がすんで、感謝の祈りをあげてから、司教は、男の方に向いて、

「あなたは、たいへん疲れておいででしょうから。」と言って、立ちあがった。それから、テーブルから銀の燭台を取って、一つは自分が持ち、一つは客に渡して、

「さあ、あなたのへやへ御案内しましょう。」と言った。客は、あとへついて行った。

この家の建て方は、寢所のある礼拝堂へ行こうとするには、司教の寢室を通り抜けなければならぬようにできていた。ふたりがこの寢室を通ろうとしている時、ちょうど、マグロアル老女は、寢台の上の方にあるコップだなへ、銀の器をしまっているところであった。これは、老女が毎晩寢る前にする、一番最後の仕事であった。

司教は、きれいな白い寢床のあるへやへ、客を連れて行った。客は、小さなテーブルの上に燭台を置いた。

「ゆっくりお休みなさい。あすの朝はお出かけになる前に、うちのうしからしぼった温かい乳を一ばいさしあげましょう。」と、司教が言うと、男は、

「ありがとうございます。」と言ったが、そのおだやかなことばと同時に、突然、変な身振りをした。もし、この家のふたりの婦人がそれを見たなら、きっと、ちぐみあがったに違いない。男は、急に司教の方を向いて、両腕を組んで、猛悪な目つきをして司教を見つめながら、あら／＼しい声で、

「あ、そうか。なるほど、こんなふうに、あなたのごく近くへ私を寢かすのですな。」と叫んだ。それから自分をささえつけたが、なんだかすこみを帯びた笑いをしたあとで、

「あなたは、これを、考えてなさったのですか。私が人殺しをしないと限っていますまい。」と言った。

「それは、神様が御存じのことです。」

司教は、こう答えて、右の手をあげて、その男のために祝福した。そうして、そのまま、あとも振り返らずに、自分のへやへ行った。

ジャンリヴァルジャンは、全く疲れきっていたので、せつかくのきれいな白いふとんのありがたみを知ろうとさえしなかった。囚人がよくするように、鼻息でろうそくを吹き消し、着物を着たまゝ、寢床の上に身を投げ出して、ぐっすり寝こんでしまった。

夜中の十二時が鳴って、それから少したつと、この家の者は、みんな眠ってしまった。

三

教会の時計が二時を打った時、ジャンリヴァルジャンは、目を覚ました。寢床がすぎたから目が覚めたのであった。それから、目をあけて、うすあたりの中であたりを見まわした。いろ／＼の考えが起って来たが、どうしても消え去らないものが、一つあった。食事の時、マゴロアル老女がテーブルに置いた六組の銀の食器と、大きな一つのさじに目をとめたのであったが、この六組の銀の食器が、かれをとらえて放さなかった。そうして、これは、わずかに二、三步のうちにあるのだ。みんな昔の純銀であった。この食器と、大さじとをいっしょにすれば、少なくとも、二百フランにはなる——十九年間働いてためた金高の二倍である。

それから、ちょうど一時間、食器のことで苦しんだ。そうして、三時が鳴った。すると、急いで半

身を起し、腕を伸ばして、寢所の片すみに置いたはいのうを手探りした。それから、両足を突き出して、床へつま先をつけて、寢台へ腰掛けたまゝ、しばらくの間ぼんやりしていたが、にわかと思ひ立ったように、身をかきめて、くつを脱ぎ、それを静かに寢床の前のくつぬぎの上に置いた。それから静かにすわったが、もし時計が十五分か三十分は鳴らなかつたら、おそらく夜明けまで、そのままここにいたのであつたらう。この男には、時計が「さあ、始めよう。」というように聞えた。すぐに立ちあがったが、またちよつとためらって、よく耳をすました。家の中はひっそりとしていた。そこで、よく氣をつけて、窓の方へまっすぐに歩いて行った。夜は暗くなかった。満月であつたので、そのうすあかりで、十分足もとを見分けることができた。窓へ行ってみると、横木も渡してなく、たゞ小さなくさびでとめてあるだけであつた。窓からは庭がよく見えた。男は窓をあけたが、身を切るようにつめたい風がへやへ吹きこんで来たので、すぐにまたしめた。

男は、目を見張って庭の方を見ていたが、それは、見るといふよりも研究しているのであつた。庭は、わけなく登れるくらいに、ごく低い白壁で囲われていた。これだけを見とけると、男は、もう決心したもののようになり、寢所の方へ行き、はいのうを取って、中を探り、何か取り出して、それを寢床の上に置いた。それから、くつをポケットの中へ押しこみ、はいのうを肩に掛けて、帽子をかぶり、ひさしを目の上へ深く引きさげた。それから、今度は、ステッキを手探りで取って、窓のすみへ持って行って置いた。そうして、寢床へ帰って来て、そこに置いたものを取りあげた。——一方の先がやりのようにとがっている短い鉄の棒——これは、坑夫の用いるさきりであつた。そのさきを右手に持って、息を殺して、忍び足で司教のへやの入口の方へ進んで行った。

入口へ行ってみると、戸は、掛けがねもかけてなかった。司教は、戸をしめてなかったのだ。ジャンリヴアルジャンは、耳をすました。物音は、何一つ聞えなかった。そこで、ねこのようにおくびよるな気がねをしなから、ごく軽く戸を押した。戸は、押されるまゝにそれだけ音も立てずに動いた。少し立ちどまってから、今度は、もう少し大胆に押した。戸は、やはり静かにそれだけ動いて行った。そのあきぐあいは、自分が通り抜けるには、もう十分であった。が、戸の近くに小さなテールブルがあつて、入口をふさいでいた。ジャンリヴアルジャンは、このじゃまものを見つけ出した。どんなことがあつても、これを、もつと廣くあけなければいけない。そこでまた、三度めを押した。前より固かつたので、さびたちょうつがいが、不意に暗やみの中で、耳ざわりな長いひびきのきしむ音を立てた。ジャンリヴアルジャンは、震えあがつた。このちようつがいの音は、ジャンリヴアルジャンの耳には、世界の終りの日のらっぱのように、鋭く恐ろしく鳴りひびいた。一時は、もう命はないものと思つた。そうして、かたくなつて、動く氣もなく静かに立っていた。耳をすまして聞くと、この音ではだれも目を覚まさなかつた。これで、まず、さしあつたの危険は無事に過ぎたが、胸の中は、まだ、恐ろしいどろろがしてやまなかつた。けれども、しりごみするようなことはしなかつた。頭の中にあるたゞ一つのことは、速くするだけのことをしてしまおうというのであつた。それで、一足踏み出すと、もうへやの中にはいっていた。

へやの中は、全く静まりかえつていた。ジャンリヴアルジャンは、氣をつけて物をよけながら進んだ。向こうのすみで、司教の眠っている静かな息が聞きとれた。ジャンリヴアルジャンは、にわか立ちどまつたが、もう寢床の近くにいた。自分で思つたよりも速く、こゝまで来たのであつた。

小半時間ばかり前から、大きな雲が出て、空は暗くなつていた。ちようど、ジャンリヴアルジャンが寢床の前に立ちどまつた時、雲は心ありげに裂けて、月の光が、にわか高い窓からさしこみ、司教の青白い顔を照らした。寝ている司教は、さながら後光の中にいるようであつた。その上、あたり静けさが、このけ高い老司教の休息に、一種不思議ないかめしさを添えた。

ジャンリヴアルジャンは、この光に輝いている姿を見て、恐れを抱いて、手に鉄のきりを持つたまま、影の中に突つ立って、身動きもしないでいた。その様子は、司教の頭を打ち碎いてしまおうか、それとも、その手に接吻しようか、どちらにしようかと思案しているようであつた。しばらくそうしていたが、それから、静かに左の手を額にあげて、帽子をとった。司教は、なおも、ごく深い平和のうちに、すやく眠っていた。

ジャンリヴアルジャンは、突然帽子をかぶつて、それから、急いで、司教のまくらもとの近くにあらコップだの方へまっすぐ行った。そうして、きりをあげてじょうをこわそうとしたが、かぎは、それに附いていた。戸だなをあけると、まず目についたものは、銀の食器のはいつているかごであつた。そこでそれを取つて、もう音などには気がねせず、急いで大またに歩いて、戸の外に出た。禮拜堂へはいつて窓を開き、ステッキを取つて外へ飛び出した。そこで、はいのうの中へ食器を入れ、かごを投げ捨てて、駆け出して庭を横切り、とらのようにへいを乗り越えて、逃げ去つた。

四

次の日、朝日ののぼるころ、司教が、庭を散歩していると、マグロアル老女が、まるで氣違ひのようになつて駆けて来て、大きな声で、

「御前様、御前様。御前様は、銀の食器のはいっているかごが、どこにあるか御存じでございませうか。」と言った。

「あゝ、知っているよ。」と、司教が言った。

「まあ、よかった。私は、それがどうなったのかわかりませんでしたので。」と、老女は言った。

司教は、ちやうど、花壇でそのかごを見つけたばかりであった。それをマグロアル老女に渡して、

「これ、こゝにあるよ。」と言った。

「そうですか。でも、中にはなんにもないではございせんか。で、銀の食器は。」

「あゝ、おまえの心配しているのは、銀の食器かい。それは、私も知らない。」

「それはたいへんです。盗まれたのでございますよ。昨晚こゝへ来たあの男が盗んだのでございますよ。」

こう言つて、マグロアル老女は、目をばちくりさせながら、禮拜堂へ駆けつけて、寢所にはいり、それから司教の所へ帰つて来たが、司教は、投げつけられたかごのために折れた一本の花を、腰をかがめて、いたわしい思いでながめていた。

「御前様、あの人はもういなくなりましたよ。銀の器は盗まれたのです。」

マグロアル老女がこう騒ぎだつたので、司教は、老女の方をちよつと見たが、しばらく黙つていた。それから、靜かに口をひらいて、

「まあ、第一、あの銀の器は私たちのものであつたらうか。」と言った。

マグロアル老女は、返事もしなかつた。少したつて、また司教は續けて「私は久しい間、まちがつ

てあの銀の器を横取りしていたのだ。あれは、貧しい人のものだ。あの人は、どんな人であつたらう。確かに貧しい人であつた。」と言つた。

「あらまあ、なんとおっしゃいます。私のためでも、お嬢様のためでもございませぬ。私たちには、どつちでも同じことでございます。が、御前様のために心配いたすのでございます。御前様は、これから何でもお食事をなさいますか。」と、マグロアル老女は言った。

「すゞの器がなかつたかな。」

「すゞはにおいがしていけません。」

「それでは、そう、鉄の器は。」

「鉄は味が悪うございます。」

「そう、それでは木の器だ。」

それからまもなく、司教は、昨夜ジャンルヴァルジャンといつしよにすわつた、その同じテーブルで、朝飯をたべた。司教はそばに黙つていた妹と、何か口の中でぶつ／＼言つていたマグロアル老女とに向かつて、牛乳の中にパンの小切れを浸してたべるには、實際、木のさじもフォークも何もいらぬものだということを、愉快そうに話して聞かせた。

「こんな考えをしている者がどこにあるう。あんな人間を家の中に入れて、自分のそばへ寝かすなんて。それで、どんな御利益があつたかといへば、なんだ、あの男は、人のものを盗んで行つてしまつた。考えるだけでもどつとする。」と、マグロアル老女は、へやを行つたり來たりしながら、ひとりごとを言つた。

司教と妹が、テーブルから立ち去とうとしている時、ちょうど、入口でだれか戸をたたく音がした。「おはいりなさい。」と、司教は言った。

戸があいた。見ると、異様なもの／＼しい姿をした人たちが、入口に現われた。三人がかりで、ひとりの男のえり首をつかまえていた。その三人は憲兵で、つかまえられているのは、ジャン・ヴァルジャンであった。隊長らしく見えたひとりの士官が戸の近くにいたが、司教の方へ進んで来て、軍人風の敬礼をして、

「御前様。」と言った。

この一言で、今まで陰気な顔をして、ひどくしおれかえていたジャン・ヴァルジャンは、まのぬけたような様子をして頭をあげて、口の中で、

「御前様……そうすると、たゞの司教ではないな。」とつぶやいた。

「黙れ、このかたは、司教様だぞ。」と、士官がしかりつけた。

そのうちに、司教が、足ばやに出て来て、

「あゝ、あなたもいたのですね。」と、ジャン・ヴァルジャンの方を見ながら、

「よくおいでなされた。それにしても、私は、燭台もいっしょにあなたにあげたつもりでしたがね。あれもやはり銀で、二百フランぐらいにはなりますよ。なぜ、あの食器といっしょに持っただけでなさらなかったのですか。」と言った。

ジャン・ヴァルジャンは、とても口では言い表わすことのできない顔つきをして、司教の方を見た。

「御前様。それではこの男の言うことはほんとうでございませうか。私たちは、道で出会いましたのですが、一足飛びに逃げ出したものですから、つかまえて調べてみました。そうしたら、この銀の食器を持っているのです。」と、士官が言った。すると、

「そうして、この男はこう言いましたでしょう。」と、司教は、にこ／＼しながら、士官のことばの先へまわって、

「この食器をくれた年をとった牧師の所へ一晩とまったのだと。みんなその通りです。それを、あなたがたは、ここまで連れておいでなされたのですな。それは、全くお考え違いです。」と言った。

「お話のような次第でしたら、このまゝ許すまでです。」と、士官が言った。

「もちろん、そうです。」と、司教は答えた。

そこで、憲兵は、ジャン・ヴァルジャンを放したが、ジャン・ヴァルジャンは、しりごみしながら、ちょうど、寢言でもいうような声で、

「ほんとうに、私を許してくれたのかしら。」と言った。

「そうだ、おまえは、もう、行きたい所へ行っている。わかったか。」と、士官が言った。

「お待ちなさい。ここにあなたの燭台がありますから、行く時は、これも持っただけでなさい。」と言って、司教は、ストーブの上から、二つの燭台を持って来て、ジャン・ヴァルジャンに渡した。ふたりの婦人は、司教の氣にさわるようなことは、一言も口へ出さず、また、身振りにも、顔色にも出さないで、静かにそのすることをながめていた。

ジャン・ヴァルジャンの手足は震えていた。そうして、見知らぬ人のような顔つきをして、渡され

たま、黙ってその燭台を受け取った。

「さあ、それでは静かにおいでなさい。ついでに言っておきますが、今度からおいでなさる時は、庭の方からおいでなさるにはおよびませんよ。いつでも、前の入口から出はいりをしなさい。戸は、夜晝とも、たゞ掛けがねでとめてあるきりですから。」と、司教が言った。

それから、憲兵の方へ向いて、

「みなさん、どうぞお帰りください。御苦労でした。」と言ったので、憲兵たちは行ってしまった。

ジャン・ヴァルジャンは、氣を失いかけている者のようだった。

司教は、更にそばに寄って、低い声で、

「忘れてはいけませんよ。決して忘れてはいけませんよ。あなたは、正直な人間になるためにこの銀の器を使うのだと、私に約束したことを。」と言った。

ジャン・ヴァルジャンは、こんな約束をしたことを思い出せなかつたので、当惑して立っていた。

司教のことばには、一つ／＼力がこもっていた。それから、なおことばを続けて、おごそかに、

「ジャン・ヴァルジャンさん、私の兄弟のジャン・ヴァルジャンさん、あなたは、もう悪人ではありません。善人ですよ。私があるのために買おうとしているものは、あなたの魂です。私はあなたの魂をば、暗い心や、破滅の世界から引き出して、そうして、それを神様にさしげるので。」と言った。

中等國語

三
(2)

APPROVED BY MINISTRY
OF EDUCATION
(DATE Sept 4, 1947)

昭和二十二年九月四日印刷 同日翻刻印刷
昭和二十二年九月八日発行 同日翻刻発行

〔昭和二十二年九月八日 文部省検査済〕

著作権所有

著作
発行者

文 部 省

翻
行 者

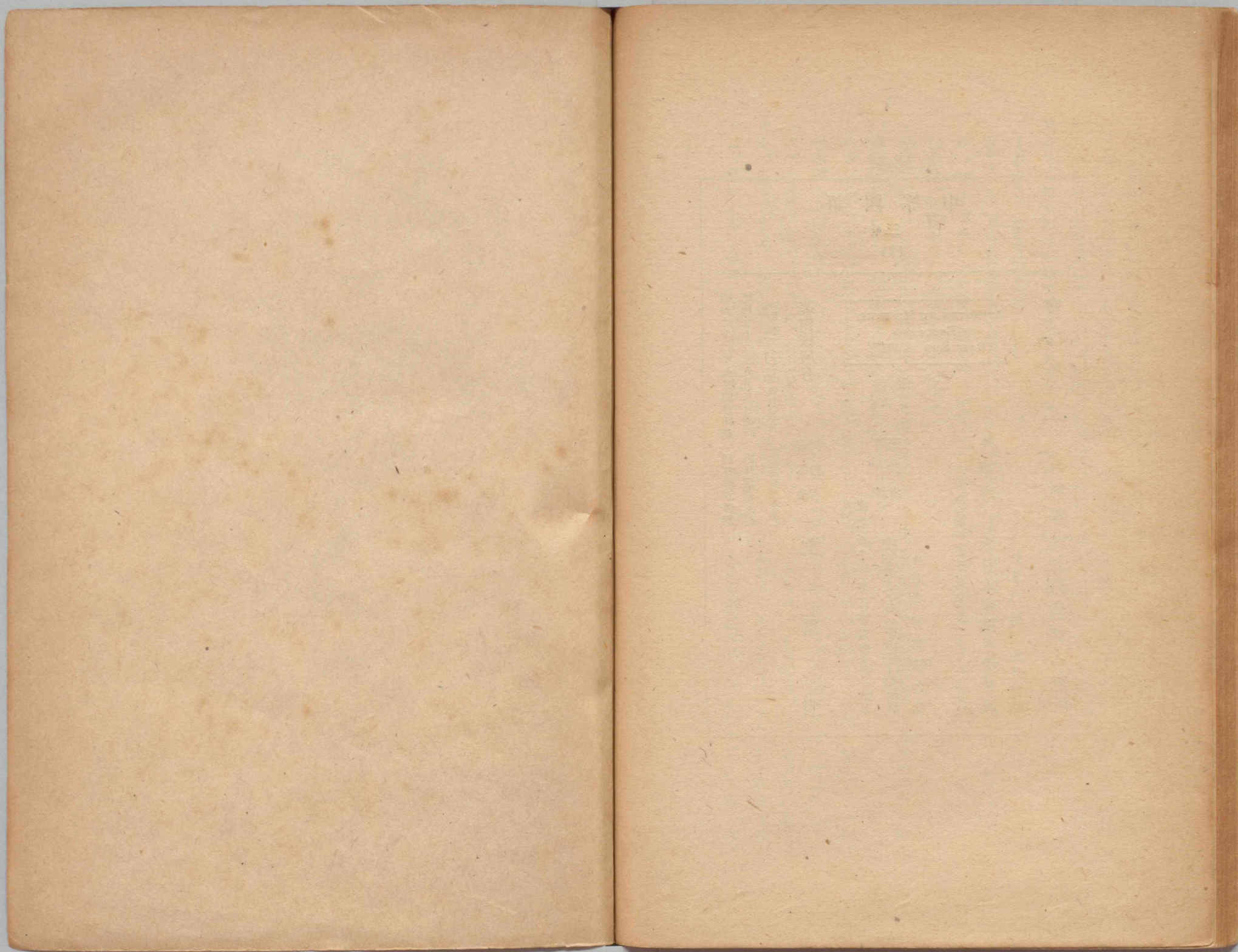
東京都千代田区神田岩本町三番地
中等學校教科書株式會社
代表者 阿部眞之助

印
刷 者

東京都新宿区市谷加賀町一丁目十二番地
大日本印刷株式會社
代表者 佐久間長吉郎

発
行 所

中等學校教科書株式會社



広島大学図書

0130449846

